

セッションF 社会と睡眠（労働安全衛生総合研究所 高橋 正也）

本セッションは労働者を対象にした調査研究が3題、夜勤に関する実験研究が1題、新たな疾患概念についての発表が1題でした。いずれの演題も最終的には研究成果をどのように実際の場面に活かせるかという点で共通していたように思います。たとえば、週労働時間の長さを考慮しても休日を確保することは抑うつ症状の低下に関連する可能性(F-1)、睡眠不足の自覚の有無によって精神健康度が異なる可能性(F-3)、夜勤後における夜間睡眠の回復は夜勤前にとる睡眠の規則性から予測できるかもしれない(F-2)という成果は、それぞれ具体的な対策につながるヒントになるでしょう。

脳神経疾患専門病棟におけるインシデントを調べた発表では、その実態が報告されました(F-4)。病棟の特徴や入院患者の行動パターンをよくふまえた上で、看護師によるケアの安全度をどのように高めるかについて審議できました。「失同調」という新しい概念は、発表者のこれまでの臨床経験が統合された形で提案されているようにみえました(F-5)。その中核をとらえるための議論が行われ、この概念の発展が期待されました。

学会発表は本来、各自の成果を持ち寄って、参加者との間で率直に議論し、次の診療や研究に生かす場と考えられます。ですが、昨今の学会ではどういうわけか、その機会が極端に削られています。ISMSJでは、双方向でよい刺激を受けられるような機会を今後も重視していく必要があると感じました。

演題番号	演題名	演者	演者所属
F-1	長時間労働者の睡眠時間と健康:休日日数の意義	高橋 正也	労働安全衛生総合研究所
F-2	4連続夜勤後の睡眠回復パターンの類型化	久保 智英	労働安全衛生総合研究所
F-3	勤労者における自覚的睡眠不足と精神健康の関係	松下 正輝	大阪大学大学院医学系研究科
F-4	脳神経疾患専門病棟における夜間インシデントの検討	小栗 卓也	名古屋市立大学 神経内科
F-5	失同調(Asynchronization):新たな疾患概念の提唱	神山 潤	東京ベイ・浦安市川医療センター